

原 著

## 社会的スキルの自己評価と対人不安との関連

原田朋枝\*<sup>1</sup> 島田 修\*<sup>2</sup>

### 要 約

本研究では、社会的スキルの自己評価と対人不安との関連について検討することを目的とした。大学生306名を対象に、Social Skills Inventory (SSI) と対人不安意識尺度を用いて調査を実施し、社会的スキルの自己評価と対人不安を測定した。

その結果、自分の社会的スキルを低く評価している人ほど対人不安を感じやすいことが示された。また、社会的感受性は対人不安に対して他の社会的スキルとは関連の仕方が異なり、自分の社会的感受性を高く評価している人ほど対人不安を感じやすいことが示された。さらに、社会的スキルの違いによって関連する対人不安の側面に違いがあることが示された。

### 序 論

人は誰しも、目上の人と会話をしたり、人前で発言したりといった対人場面で不安や緊張を経験したことがあるだろう。これらの対人場面で経験する不安や緊張は対人不安 (social anxiety) と呼ばれている。対人不安の発生機序については、これまでの研究において幾つかの理論が提唱されている。それらの1つに、対人不安の発生・増大の原因を社会的スキルの欠如と捉えた「社会的スキル欠如仮説」がある<sup>1)</sup>。対人不安の高い人と低い人との差異を調べた研究では、実際にスキルが不足している人ほど対人不安は高くなるという結果が報告されている<sup>2)</sup>。

しかし Leary<sup>3)</sup> は、実際に社会的スキルが欠如しているという事実よりも、自分の社会的スキルが欠如しているという自己評価の方が、対人不安を引き起こす上ではるかに重要であると指摘している。対人不安と社会的スキルの自己評価との関連について調べた研究では、社会的スキルの自己評価が低い人ほど対人不安は高くなるという結果が報告されている<sup>4)</sup>。

以上のように、対人不安と社会的スキルとの関連については、異なる2つの立場から研究が行われてきた。しかし、客観的には優れた社会的スキルを身に付けていると思われる人たちの中にも、強い対人不安を感じている人たちが存在することが指摘されている<sup>5-6)</sup>。また、異性とつきあう際に対人不安を経験する人を対象とした研究では、対人不安を抱い

ている被験者には独立した2つのグループが存在することが指摘されている。第1のグループは、実際に社会的スキルが不足していると同時に自分の社会的スキルが不足していることを認識しており、その結果として対人不安を感じているというグループである。第2のグループは、優れた社会的スキルを身に付けているにもかかわらず、社会的スキルに対する自己評価が低く、その結果として対人不安を感じているというグループである<sup>7)</sup>。これらの見解から社会的スキルの自己評価は、対人不安の発生・増大にとって重要な役割を果たしている可能性が考えられる。

そこで本研究では、Leary<sup>3)</sup> の考えに基づき、社会的スキルの自己評価と対人不安との関連について質問紙を用いて検討することを目的とした。まず第1に、自分の社会的スキルを低く評価している人ほど対人不安を感じやすいかどうかを検討する。第2に、社会的スキルを一般的なコミュニケーション能力として位置づける Riggio<sup>8)</sup> の枠組みを用いて、社会的スキルの違いによって対人不安との関連の仕方が異なるか検討する。Riggio<sup>8)</sup> は、社会的感受性に優れている人は、自意識が高く社会的に不安であり、社会的相互作用への参加を嫌うようになる可能性があるとして指摘している。このことから、自分の社会的感受性を高く評価している人ほど対人不安を感じやすいと予測した。さらに、社会的スキルの違いによって関連する対人不安の側面にも違いがあるのか検討する。

\*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 臨床心理学専攻 \*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科 (連絡先) 原田朋枝 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

## 方 法

## 1. 調査対象者

川崎医療福祉大学に所属する大学生400名を対象に実施し、有効回答者306名(男性65名,女性241名,平均年齢18.9±2.16歳)を分析対象とした。無効回答とした基準は、性別、年齢の記入漏れおよび1項目以上の記入漏れであった。

## 2. 調査時期および手続き

2000年5月下旬から6月上旬にかけて、講義時間の一部を用いて質問紙を配布し、集団場面で実施した。所要時間は20分程度であった。

## 3. 質問紙の構成

## (1) 社会的スキルの自己評価を測定する尺度(90項目)

Riggio<sup>8)</sup>が社会的スキルを一般的なコミュニケー

ション能力として位置づけ、その個人差を測定するために作成した自己報告尺度 Social Skills Inventory (以下、SSIと記す)を榎野<sup>9)</sup>が翻訳した日本語版SSIについて、「非常に当てはまらない(1点)」から「非常に当てはまる(5点)」の5段階で評定を求めた。得点範囲は90点-450点であった。日本語版SSIにおける各下位尺度の具体的内容および項目例は表1に示す。

## (2) 対人不安傾向を測定する尺度(32項目)

林・小川<sup>10)</sup>が一般人の中に見られる対人恐怖症的傾向を測定するために作成した対人不安意識尺度から、特に対人場面と関連があると思われる5つの下位尺度(I - 対人関係で緊張する悩み, II - 自分や他人が気になる悩み, III - 集団に溶けこめない悩み, IV - 多勢の人に圧倒される悩み, VII - くつろいで人とつき合えない悩み)について、「非常に当ては

表1 日本語版SSIにおける各下位尺度の具体的内容および項目例

下位尺度名と具体的内容	項目例
I. 情緒的表現性(emotional expressivity): 15項目 非言語的な情報を媒介として愛情や態度や地位を伝える社会的技能。この技能は単に姿勢や態度によって情緒状態を表現する能力だけでなく、情緒状態を自発的にしかも正確に非言語的コミュニケーションにおいて表現する能力も含まれる。	・私は人一倍早口です。 ・私は表情に富んだ目をしていると言われます。
II. 情緒的感受性(emotional sensitivity): 15項目 非言語的情報を媒介として他者の情緒状態や信念、態度、地位(二者の間でどちらが優勢かなど)を解読する社会的技能。	・私は話の内容だけでなく、その人の身振りにも注目します。 ・私ほど感受性が強く、理解力のある人はいないと思います。
III. 情緒的コントロール(emotional control): 15項目 非言語的情報を媒介とした表現を制御する社会的技能。	・私は自分の感情を誰からも分からないように隠すことができます。 ・私は本当は嬉しくても悲しいふりができます。
IV. 社会的表現性(social expressivity): 15項目 言語的情報を媒介とした表現やその流暢さや会話のきっかけをつくる社会的技能。	・私はパーティを開くのが好きです。 ・私は社会的に活動するのが好きです。
V. 社会的感受性(social sensitivity): 15項目 言語的情報を媒介とした知識や社会的規範を解読する社会的技能。	・私はまわりの人々の持つ雰囲気非常に影響を受けやすいです。 ・私は批判にたいへん敏感です。
VI. 社会的コントロール(social control): 15項目 言語的情報を媒介とした表現を制御する社会的技能。	・私はグループのリーダーに選ばれることがよくあります。 ・私はどんな状況にも、とても容易に順応できます。

注) 榎野(1988)に基づき作成。

表2 対人不安意識尺度の項目例

下位尺度名	項目例
I. 対人関係で緊張する悩み: 7項目	・つき合いの長い友人と話す時も緊張がとれない。 ・友達が自分を避けているような気がする。
II. 自分や他人が気になる悩み: 7項目	・先のことを考えすぎる。 ・他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる。
III. 集団に溶けこめない悩み: 7項目	・集団の中に溶けこめない。 ・対人関係がぎこちない。
IV. 多勢の人に圧倒される悩み: 7項目	・人がたくさんいるところでは気はすかしくて話せない。 ・会議などの発言が困難である。
VII. くつろいで人とつき合えない悩み: 4項目	・人と自然につき合えない。 ・二人きりでいると、相手を意識してしまって緊張してしまう。

まらない(1点)」から「非常に当てはまる(5点)」の5段階で評定を求めた。得点範囲は32点-160点であった。具体的な項目例は表2に示す。

4. 資料の整理

調査対象者ごとに、日本語版 SSI と対人不安意識尺度の各々の総得点および各下位尺度別得点を算出した。なお、本調査の分析は全て SAS を利用した。

結 果

1. 社会的スキルの自己評価と対人不安の総得点との関連

社会的スキルの自己評価と対人不安との関連を検討するために、社会的スキル総得点の上位1/3を高群(n=102),下位1/3を低群(n=102)に分類し、社会的スキル総得点高・低群における対人不安総得点の平均値を算出した(図1)。図1を見ると、スキル低群の方がスキル高群よりも対人不安総得点が高いことが示されている。そこで、スキル総得点高・低群間における対人不安総得点の差についてt検定を行った。その結果、スキル総得点高・低群間の対人不安総得点に有意差が認められた(t(202)=4.87, p<.001)。このことから、自分の社会的スキルを低く評価している群の方が高く評価している群よりも対人不安総得点が高いことが示された。

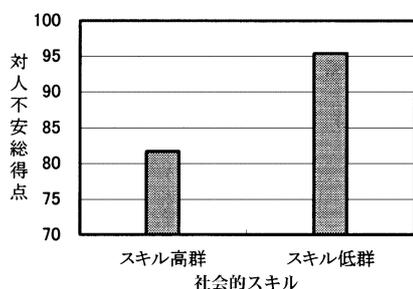


図1 社会的スキル総得点高・低群における対人不安総得点

2. 各下位尺度ごとの社会的スキルの自己評価と対人不安総得点との関連

社会的スキルの違いによって対人不安との関連の

仕方が異なるか検討するために、社会的スキルの各下位尺度ごとにスキル高・低群間における対人不安総得点の差についてt検定を行った(表3)。その結果、社会的感受性(t(202)=-6.24, p<.001),社会的コントロール(t(202)=9.18, p<.001),社会的表現性(t(202)=7.92, p<.001),情緒的表現性(t(202)=2.67, p<.01)において、対人不安総得点に有意差が認められた。なお、社会的感受性においてのみ、スキル高群の方がスキル低群よりも対人不安総得点が高く、自分の社会的感受性を高く評価している群の方が低く評価している群よりも対人不安総得点が高いことが示された。

3. 社会的スキルの自己評価と対人不安の各下位尺度との関連

社会的スキルの違いによって関連する対人不安の側面にも違いがあるのか検討するために、社会的スキルの各下位尺度ごとにスキル高・低群間における対人不安の下位尺度別得点の差についてt検定を行った(表4)。その結果、「社会的」なスキル(社会的表現性,社会的感受性,社会的コントロール)のうち、社会的コントロールでは、対人不安の全ての下位尺度で有意差が認められた(I:t(202)=5.37; II:t(202)=4.22; III:t(202)=8.67; IV:t(202)=11.28; VII:t(202)=7.75,いずれもp<.001)。また、社会的表現性,社会的感受性ではそれぞれ自分や他人が気になる悩み,集団に溶けこめない悩みといった対人不安の下位尺度について有意差が見られなかったものの,その他の4つの対人不安の下位尺度では有意差が認められた(社会的表現性は, I:t(202)=4.71; III:t(202)=10.97; IV:t(202)=7.69; VII:t(202)=7.13,いずれもp<.001。社会的感受性は, I:t(202)=-4.41; II:t(202)=-10.42; IV:t(202)=-5.61; VII:t(202)=-3.96,いずれもp<.001)。

一方、「情緒的」なスキル(情緒的表現性,情緒的感受性,情緒的コントロール)では、情緒的表現性と情緒的感受性において、集団に溶けこめない悩み,多勢の人に圧倒される悩みという対人不安

表3 社会的スキルの各下位尺度における群別の対人不安総得点の比較

N=204 (H, L=102)	SS					
	EE	ES	EC	SE	SS	SC
H	85.15 (21.94)	85.25 (22.14)	84.96 (21.49)	77.59 (18.42)	96.23 (20.11)	74.53 (19.85)
L	93.13 (20.67)	90.14 (21.35)	89.20 (17.12)	98.24 (18.84)	78.34 (20.83)	99.57 (19.09)
t 値	2.67**	1.61	1.56	7.92***	-6.24***	9.18***

注) H:スキル高群, L:スキル低群, SS:社会的スキル  
 EE:情緒的表現性, ES:情緒的感受性, EC:情緒的コントロール  
 SE:社会的表現性, SS:社会的感受性, SC:社会的コントロール  
 ( )内は標準偏差, \*\*: p<.01, \*\*\*: p<.001

表4 社会的スキルの各下位尺度における群別の対人不安下位尺度別平均得点の比較

N=204 ( H, L=102 )		SA				
		I	II	III	IV	VII
E	H	15.44( 4.65 )	22.81( 6.15 )	17.17( 5.92 )	19.66( 6.23 )	10.07( 3.58 )
	L	16.36( 4.37 )	22.66( 5.87 )	21.51( 6.16 )	22.00( 6.20 )	10.60( 3.18 )
t 値		1.46	-0.19	5.13***	2.69**	1.12
S	H	15.51( 4.90 )	23.02( 6.18 )	17.96( 6.52 )	18.97( 5.66 )	9.78( 3.64 )
	L	15.62( 4.38 )	22.11( 5.67 )	20.26( 6.26 )	21.85( 6.06 )	10.29( 3.20 )
t 値		0.17	-1.10	2.57*	3.51***	1.06
S	H	15.21( 4.43 )	21.75( 6.12 )	18.69( 6.43 )	19.85( 5.80 )	9.46( 3.15 )
	L	15.57( 3.64 )	22.99( 4.96 )	19.09( 5.67 )	21.16( 5.49 )	10.39( 2.97 )
t 値		0.64	1.58	0.47	1.65	2.17*
S	H	14.22( 4.10 )	21.62( 5.90 )	15.18( 4.66 )	17.80( 5.35 )	8.77( 2.88 )
	L	16.99( 4.32 )	23.02( 5.34 )	23.00( 5.49 )	23.54( 5.30 )	11.69( 2.96 )
t 値		4.71***	1.78	10.97***	7.69***	7.13***
S	H	16.87( 4.54 )	25.97( 5.22 )	19.53( 6.28 )	22.91( 5.74 )	10.94( 3.37 )
	L	14.15( 4.28 )	18.51( 5.00 )	18.25( 5.86 )	18.26( 6.09 )	9.17( 3.02 )
t 値		-4.41***	-10.42***	-1.50	-5.61***	-3.96***
S	H	13.77( 4.53 )	20.35( 6.31 )	15.41( 5.42 )	16.56( 5.06 )	8.43( 2.88 )
	L	17.16( 4.47 )	23.77( 5.23 )	22.12( 5.62 )	24.77( 5.34 )	11.75( 3.22 )
t 値		5.37***	4.22***	8.67***	11.28***	7.75***

注) H: スキル高群, L: スキル低群, SA: 対人不安, SS: 社会的スキル  
 EE: 情緒的表現性, ES: 情緒的感受性, EC: 情緒的コントロール  
 SE: 社会的表現性, SS: 社会的感受性, SC: 社会的コントロール  
 I: 対人関係で緊張する悩み, II: 自分や他人が気になる悩み, III: 集団に溶けこめない悩み  
 IV: 多勢の人に圧倒される悩み, VII: くつろいで人とつき合えない悩み  
 ( ) 内は標準偏差, \*: p<.05, \*\*: p<.01, \*\*\*: p<.001

安の2下位尺度で有意差が認められたが(情緒的表現性は, III:  $t(202) = 5.13, p < .001$ ; IV:  $t(202) = 2.69, p < .01$ . 情緒的感受性は, III:  $t(202) = 2.57, p < .05$ ; IV:  $t(202) = 3.51, p < .001$ ), その他の3つの下位尺度では有意差が見られなかった. なお, 情緒的コントロールは, くつろいで人とつき合えない悩みで有意差が認められたものの(VII:  $t(202) = 2.17, p < .05$ ), その他の4つの下位尺度では有意差は見られなかった.

以上の結果から, 社会的スキルの違いによって関連する対人不安の側面に違いがあることが明らかになった.

## 考 察

### 1. 社会的スキルの自己評価と対人不安との関連

社会的スキルの自己評価と対人不安との関連について検討した結果, 自分の社会的スキルを低く評価している人ほど対人不安を感じやすいことが示された. この結果は, Leary<sup>3)</sup>の考え方や Smari et al.<sup>4)</sup>の研究結果と一致するものである.

ではなぜ自分の社会的スキルを低く評価している人は対人不安を感じやすいのだろうか. この点について Leary<sup>3)</sup>は, 対人不安に関する包括的な自己呈示理論を用いて説明している. つまり, ユーモア感覚, 口ごもらないで話を進める能力, あるいは人前で話をする能力のような重要な社会的スキルが欠けていると信じている人は, 自分は対人場面において他者に好ましい印象を与えることができず, そのような対人場面では肯定的に評価されないと結論付け, その結果, 対人不安が発生するようになるというのである.

Leary<sup>3)</sup>の指摘するように, 私たちの生活は他者との関わり合いを抜きにしては語れないものである. また, 私たちは他者と調和的な対人関係を形成・維持することを重視する. 従って, 自分に対する他者の評価は人々にとって最大の関心事であり, 他者から肯定的な評価を引き出すことが必要となる. しかし, 自分の社会的スキルを低く評価している人は, 他者から肯定的な評価を引き出すための対人的技能に自信が持てず, 自分は対人場面において他者から

肯定的に評価されないと思ひ込みやすい。従って、対人場面において不安を感じやすいものと考えられる。

## 2. 各下位尺度ごとの社会的スキルの自己評価と対人不安との関連

各下位尺度ごとの社会的スキルの自己評価と対人不安との関連について検討した結果、自分の社会的感受性を高く評価している人ほど対人不安を感じやすいことが示された。この結果は、本研究の予測を支持するものであり、Riggio<sup>8)</sup>の研究結果と一致するものである。

その他、各下位尺度ごとの社会的スキルの自己評価と対人不安との関連を検討したことにより、以下の結果が見出された。

第1は、対人不安総得点の得点範囲は32点-160点であるにもかかわらず、本研究では全ての社会的スキルで、対人不安総得点の得点範囲が74.53点-99.57点であったことである。これは、現代大学生の対人不安意識が量的に減弱していることを示唆する結果ではないかと考えられる。事実、田中ら<sup>11)</sup>は、従来の対人恐怖症論をふまえ、青年期にある個人の対人不安意識の過去10年間における変化を対人不安意識尺度を用いて数量的に検討した結果、大学生の対人不安意識は量的に減弱していることが明らかにされている。本研究から得られた結果は田中ら<sup>11)</sup>の知見を支持する方向にあると言える。

第2は、自分の社会的コントロールを高く評価している人の対人不安総得点が最も低いことである。これは、自分の社会的コントロールに自信を持つことによって対人不安が最も抑制される可能性があることを示唆している。社会的コントロールに優れている人は、機転がきき、自己評価が高いことが指摘されており<sup>8)</sup>、自己評価と対人不安の間には負の相関があることが報告されている<sup>12)</sup>。従って、自分の社会的コントロールを高く評価している人は、自己評価が高く、その結果として対人不安を感じにくいものと考えられる。

## 3. 社会的スキルの自己評価と対人不安の各下位尺度との関連

「社会的」なスキルでは、社会的表現性と社会的感受性においてそれぞれ自分や他人が気になる悩み、集団に溶けこめない悩みを除いて、全ての対人不安の下位尺度で有意差が認められた。一方、「情緒的」なスキルでは、情緒的表現性と情緒的感受性において、集団に溶けこめない悩み、多勢の人に圧倒される悩みという対人不安の2下位尺度、情緒的コントロールにおいては、くつろいで人とつき合えない悩みという下位尺度としか有意差が認められな

かった。「情緒的」なスキルよりも「社会的」なスキルの方が多様な対人不安と関連すると考えられる。なお、「情緒的」なスキルのうち、情緒的表現性と情緒的感受性は対人不安の共通した2下位尺度とのみ有意差が認められた。これら2つの下位尺度は、ともに複数の他者と接触する場面で生じる不安であると考えられる。つまり、複数の他者と接触する場面では、情緒的表現性と情緒的感受性という2つのスキルを高く評価しているか否かによって対人不安の程度が異なると考えられる。

また、対人不安のうち多勢の人に圧倒される悩みは、情緒的コントロール以外の全ての社会的スキルにおいて有意差が認められた。従って、多勢の人に圧倒される悩みと社会的スキルの自己評価との関連はスキルの違いにかかわらず共通していると考えられる。

さらに、社会的スキルを情報の伝達（情緒的表現性、社会的表現性）、情報の解読（情緒的感受性、社会的感受性）、情報の管理・制御（情緒的コントロール、社会的コントロール）の3つに分類すると、情報の伝達に関するスキルでは自分や他人が気になる悩みにおいて有意差が見られなかった。このことから、情報の伝達に関する自己評価は自分や他人が気になる悩みの程度と関連性が低いと思われる。また、情報の管理・制御に関するスキルではくつろいで人とつき合えない悩みにおいて有意差が認められた。従って、情報の管理・制御に関するスキルを高く評価しているか否かによってくつろいで人とつき合えない悩みの程度が異なると考えられる。

本研究では、私たちが日常場面で経験する対人不安について社会的スキルの自己評価との関連を包括的に検討した結果、自分の社会的スキルに自信が持てない人は対人不安を感じやすいことや社会的感受性は対人不安に対して他の社会的スキルとは異なる働きをすることが示された。

最後に本研究の問題点と今後の課題について述べる。本研究では、質問紙を用いて検討を行ったため、社会的スキルの自己評価と対人不安がともに個人の自省による自己報告であり、そのため両者の間の関係が認められやすかった可能性が考えられる。今後、社会的スキルの自己評価と他者評価の両方を測定し、対人不安との関連についてより詳しく検討する必要がある。

また、本研究では、情緒的感受性におけるスキル高・低群間の対人不安総得点に有意差は見られなかった。しかし、情緒的感受性に優れている人は、他者の非言語的で情緒的なしぐさに特に注意を払い、非言語的コミュニケーションにおいて他者の情

緒を速く効率的に解読することができるため、他者によって情緒的に喚起されやすいことが指摘されている<sup>13)</sup>。このことから、他者のしぐさや態度などの

影響を受け、その結果として不安を感じる可能性があるのではないかと考えられる。この結果についても今後検討する必要がある。

#### 文 献

- 1) Arkowitz H, Hinton R, Perl J and Himadi W: Treatment strategies for dating anxiety in college men based on real-life practice. *The Counseling Psychologist*, **7**, 41-46, 1978.
- 2) Monti PM: Multi-model measurement of anxiety and social skills in a behavioral role-play test: Generalizability and discriminant validity. *Behavioral Assessment*, **1**(1), 15-25, 1984.
- 3) Leary MR, 生和秀敏(監訳) 対人不安. 北大路出版, 1990. (Leary MR: *Understanding social anxiety: Social, personality, and clinical perspective*. Beverly Hills, California: Sage Publications, 1983.)
- 4) Smari J, Bjarnadottir A and Bragadottir B: Social anxiety, social skills and expectancy / cost of negative social events. *Scandinavian Journal of Behaviour Therapy*, **27**(4), 149-155, 1998.
- 5) Pilkonis P: Shyness public and private, and its relationship to other measures of social behavior. *Journal of Personality*, **45**, 585-595, 1977.
- 6) Zimbardo: *Shyness: What it is and what to do about it*. New York: Jove, 1977. (木村駿, 小川和彦訳: シヤイネス. 勁草書房, 1982.)
- 7) Curran JP, Wallander JL and Fischetti M: The importance of behavioral and cognitive factors in heterosexual-social anxiety. *Journal of Personality*, **48**, 285-292, 1980.
- 8) Riggio RE, Tucker J and Throckmorton B: Social Skills and deception ability. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **13**, 568-577, 1987.
- 9) 榎野潤: 社会的技能研究の統合的アプローチ(1)—SSIの信頼性と妥当性の検討—。関西大学大学院『人間科学』, **31**, 1-16, 1988.
- 10) 林洋一, 小川捷之: 対人不安意識尺度構成の試み。横浜国立大学保健管理センター年報, **1**, 29-45, 1981.
- 11) 田中康裕: 青年期における対人不安意識の特性と構造の時代的推移。心理臨床学研究, **12**(2), 121-131, 1994.
- 12) 岡田努, 永井徹: 青年期の自己評価と対人恐怖の心性との関連。心理学研究, **60**(6), 386-389, 1990.
- 13) Friedman HS and Riggio RE: Effects of individual differences in nonverbal expressiveness on transmission of emotion. *Journal of Nonverbal Behavior*, **6**, 96-102, 1981.

(平成14年5月2日受理)

## The Relationships between Self-Evaluation of Social Skills and Social Anxiety

Tomoe HARADA and Osamu SHIMADA

(Accepted May 2, 2002)

Key words : SOCIAL SKILLS, SOCIAL ANXIETY, SELF-EVALUATION

### Abstract

In the present study, the relationships between self-evaluation of social skills and social anxiety were examined. The subjects, 360 university students, were asked to fill in the Social Skills Inventory ( SSI ) and measures of social anxiety.

The results show that the lower self-evaluation of social skills was, the higher social anxiety was felt. And social sensitivity ( measured with a subscale of SSI ) differed from other social skills ( measured with a subscale of SSI ) in the way it related to social anxiety. The higher self-evaluation of social sensitivity was, the higher social anxiety was felt. In addition, because of differences in social skills, its relation to social anxiety ( measured with a subscale of measures of social anxiety ) was different.

Correspondence to : Tomoe HARADA

Master's Program in Clinical Psychology, Graduate School of  
Medical Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.12, No.1, 2002 75-81)